



蘆刈（あしかり）を舞う里井氏（京都観世会館で）

趣味探訪

能

里井陸郎

（大学文学部教授・
日本文学講読）

——先生は謡（うたい）をお始めになつてから何年ぐらいになりますか。

里井 同志社に勤めた翌年ぐらいから始めたので、三十四年ぐらいになります。はじめ、同志社中学の先生方の同好会のようなものをこしらえて、みんなでやろうではないかというわけで、それがきっかけです。

——先生の御力量はいうまでもなく師範格でいらつしやいますが、御流儀は観世ですか。里井 ええそうです。僕のいとこに謡をやっているのがいて、それに最初手ほどきを受けて、後、片山九郎右衛門さんに入門したんです。おやじが稽古をしているのが、小さい時分から自然、聞き覚えるような格好で耳についてましたので、進度はかなり早かったです。

——先生の御専門の著作には、「謡曲文学」や、「花伝書」の英訳などがございまして、趣味と実益との接点がかなりうまくいっておられるように思いますが。

里井 専門に役立っているということもありますが、単なる遊びとか趣味とかでなくて一種の教養といふか多少とも人格的なものとして身につけているということがあるかも知れませんね。

——謡曲で最も好きな作品を一つ……。

里井 「鉢の木」など、多少芝居っ気のあるまた聞かせどころのあるものが好きですね。これも年令的なものがありまして、若いころは女ものがうたいたかったし、うたっても気持ちが悪かったんですが、年とともに声量も落ちてきますし、声の質も変わってきますのでこのごろはどちらかというと渋いものの方がうたいやすいし、うたおうかという気持ちを持てますね。

——仕舞の方も並行してやってこられたわけですか。

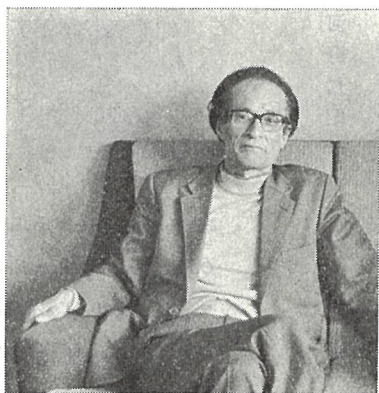
里井 そうですね、一、二年遅れた程度で、ほとんど並行してやってきました。

——能はいままで何番お舞いになりましたか。

里井 七番ほど舞っております。

——能における「人格の転換」について…。

里井 「のりうつり」が芸能としての能の原型です。ちょっと次元がちがいますが、私は舞台上立つと、まるで人が変わったように見えるとよくいわれるんですが、舞台という特殊



里井陸郎氏

な時間と空間の中で、しかも演技者としての独立した一つの人格であるというけじめがはっきりしていないと、見た目に危うしという、いかにも素人（しろうと）が氣を使ひながら舞っているという、そんな不安定さが出てきますね。そういう不安定な状況がある間は、やはり人を感動させないし、引き付けられない……。いわゆる同化と異化、むづかしいところですよ。

——いまでお舞いになった能のなかで最も印象に残ったものは何ですか。

里井 専門家にほめられたのは「山姥（やまんば）」……。自分で気持ちよく舞えたのは、「蘆刈（あしかり）」。これは一番遅い時期に舞ったものですよ。

——能というのは、実在の人格が仮面の下に隠れて、仮面が一つの人格を表象しているわけですが、演者からいうと、実際あれほど苦痛なことはありませんね。面（おもて）を着けるといえるのは……。

里井 目の穴からは天井が、鼻の穴からは足もとがかすかに見える程度で、いつてみれば、薄暗がりのなかに自分がボタンと存在してい

るといふ一種の孤独感がありますね。

——ひっそりと孤独感に浸っておればよろしいが、実際には汗と涙と唾でね……。

里井 面と衣装が舞うんであって肉体が舞うんじゃない、ところが素人（しろうと）はどうしても肉体で舞ってしまうんですよ。

——これからの御計画は。

里井 今年、もう一度稽古を復活しようという発心を起こしたわけなんです、その動機は、二年後が僕の還暦ということと、同志社の創立一〇〇周年という偶然が重なるんです。記念に一番舞いたいなあと考えたわけなんです。できたら、「砧（きぬた）」でも。

——今後いつその御活躍を期待しております。どうもありがとうございます。

（一九七三、四、五）

* この記事の取材にあたっては、大学商学部教授・宮井敏氏の協力を得ました。